

低開発国におけるバックパッカー観光客の 責任ある行動に関する考察

Responsible Behavior of Backpacker Tourists in Less Developed Countries

薬師寺 浩之*

要 旨

低開発国におけるバックパッカー観光客(以下バックパッカー)は、社会・文化的に悪影響を及ぼす観光客であると批判を受けることがある。バックパッカー一人一人が「郷に入れば郷に従え」の精神で責任ある行動を取ったならば、この問題は多少なりとも緩和されるであろう。しかしながら、バックパッカーが解釈する旅行中の責任ある行動については十分に理解されていない。そこで本稿では、バックパッカーの責任ある行動に対する認識と自己評価について、タイ・チェンマイでのインタビュー調査をもとに考察する。さらに調査結果から、バックパッカーが社会・文化的に悪影響を及ぼす観光客であると批判を受ける根本的な原因も探る。

バックパッカーは責任ある行動の重要性を認識し、責任ある観光客であると自信を示した。しかしながら、バックパッカーが責任ある方法で行動できる空間は、バックパッカー文化に支配され、心理状態をコントロールできるエンクレーブ¹⁾のみである。エンクレーブの外の現実世界では、自然環境や異文化に対する困惑や予期せぬ困難がバックパッカーの責任ある行動を阻害する。それでも、エンクレーブ内でタイ料理やタイマッサージのクラスに

* 立命館大学文学部地理学実習助手

参加するなどして一時的に「演出されたほんもの」(staged authenticity)を経験するのみで、それは真に「ほんもの」の経験であると評価し、そのような経験をする自分は責任ある観光客であるとの正当化につながった。エンクレープは、バックパッカーが旅行を成功させるために必要不可欠である。しかしその存在は、エンクレープの外の現実世界で「郷に入れば郷に従え」の精神で行動する努力を妨げる要因でもある。その精神の重要性を認識することのみにとどまり、現実世界で認識どおりに行動する努力はしていないのである。これが、社会・文化的に悪影響を及ぼす観光客であると批判を受ける原因の一つとなっている。

Abstract

Backpacker tourists in less developed countries are sometimes criticized as being socially and culturally irresponsible. One of the solutions to this criticism is to make backpacker tourists fully aware of the importance of behaving responsibly during a trip, with the adage, "When in Rome, do as the Romans do." However, academics have not understood how backpacker tourists interpret their responsible behavior on a trip abroad. Therefore, this paper aims to explore their awareness and evaluation of responsible behavior. In addition, it explores why backpacker tourists are the target of criticism. This research employed interview survey for backpacker tourists in Chiang Mai, Thailand.

The result showed that backpacker tourists recognized the importance of behaving responsibly and then evaluated their responsible behavior in their trips to Thailand. However, it is notable that the spaces where they behaved responsibly were restricted to backpacker enclaves. They could control themselves physically and emotionally in these enclaves because backpacker culture was dominant there. In other words, in the real world

(spaces outside backpacker enclaves), they could not behave responsibly owing to ecological and cultural confusions and unexpected difficulties. They exaggerated their behavior; they believed that they were being truly responsible by merely engaging in intercultural experiences temporarily in a staged authentic manner in enclaves (e.g., participation in Thai cooking classes and Thai massage classes). There is a propensity for backpacker tourists to be satisfied with their travel experiences in enclaves. This is one of the factors for not making an effort to behave responsibly outside backpacker enclaves, despite of the recognition of importance. Therefore, they are criticized as being socially and culturally irresponsible in less developed countries.

キーワード：バックパッカー観光客, 責任ある行動, 低開発国, 異文化体験, エンクレーブ

Key words : backpacker tourists, responsible behavior, less developed countries, intercultural experiences, enclaves

1. はじめに

バックパッカー観光は近年、急速にそのマーケットが拡大し²⁾、それと比例して観光学研究者や社会学者などによって学問的研究として注目され始めている。バックパッカー観光客（以下バックパッカー）はバックパックを背負い、ゲストハウスやホテル等の低予算宿泊施設を利用することに代表される、予算に敏感な観光客であると一般的に定義される。それに加え、旅行することそれ自体に意味を見出そうとし、それを軸としてバックパッカーとしてのサブカルチャーやアイデンティティーを形成することも大きな特徴である (Pearce, 2005)。「ほんもの」の経験を通して異文化を理解することが、最たる旅行動機であるとされる。それに加えて、娯楽や休息、また大多数を

占める大学生を中心とした若年層（18-25歳）にとっては、大人への通過儀礼的側面として旅行を通しての自己能力の開発も主な旅行動機として挙げられる。

持続可能な観光の議論の中でのバックパッカー観光に対する記述を考察すると、経済面・自然環境面では他のタイプの観光と比べて持続可能性のあるものであるが、バックパッカーの行動は観光地に社会・文化的悪影響をおよぼすとの指摘が多い。低開発国における影響を考察した場合、経済的には草の根レベルでの経済発展に貢献できるとされる。それは、バックパッカーは他の観光客と比べて一つの観光地に長く滞在する上、地元所有の観光施設やレストラン、交通機関等を利用するため、彼（女）らの支出が地域内にとどまるからである。さらに、彼（女）らは高品質なサービスを期待してはいないため、比較的教育を受けていない貧困層の非熟達労働者でもゲストハウスの料理人や清掃員などとしてバックパッカー産業に従事することが可能であり、バックパッカー観光は観光を用いた貧困削減（pro-poor tourism）に貢献できるものとされる（Scheyvens, 2002a, 2002b；Hampton, 1998）。一方で、社会・文化的影響はより複雑なものとなる。パーティー天国と称されるタイ・パンガン島やインド・ゴアに代表される快楽を追及したバックパッカーが集まるビーチリゾート観光地では、麻薬摂取や過度の飲酒行動などの問題が深刻である。そこでのバックパッカーの行動は地元住民を尊重した行動とは程遠く、その行動は「新帝国主義的」（neo-colonialism）であると揶揄される。しかしながら、より多くの観光地で見られる社会・文化的悪影響は、バックパッカーのドレスコードやプライバシーを侵害するような写真撮影行動など、文化を破壊するというよりは侵食するような行動である（Mowforth, Charlton and Munt, 2008）。バックパッカーの価値観と地元住民の価値観の違いに大きな差が見られ、バックパッカーは無意識にも文化的・宗教的に踏み入ってはいけないラインを超えてしまうこともある（Shaw and Williams, 2002）。さらに藤巻（2009：235）が言うように、バックパッカーなどの部外

者をビジネスの対象(収入源)とみなす地元住民と、「観光地民はしたたかだ」と文句を言う強欲なバックパッカーとの間に起こる摩擦も問題となる。

ここで注目すべき点は、異国の地を訪ね、地元住民や文化との出会いを伴う観光は「他者理解の旅」に他ならないということである(藤巻, 2009: 236)。つまりバックパッカー一人一人が自分の行動を認識し、「郷に入れば郷に従え」の精神で責任ある行動を取ったならば、多かれ少なかれ上記の社会・文化的問題は緩和されるのである。観光産業が今や世界最大の産業と言われるまでに成長し、持続可能な開発や消費活動を行うよう努力することが求められる現在、観光客を含めたすべての観光に関わる利害関係者が今一度自分自身の行動を反省し、悪い行動を改めることが求められよう。しかしながら、バックパッカーが解釈する自分自身の責任ある観光行動については十分に理解されていない。そこで本稿では、バックパッカーの責任ある行動に対する認識と自己評価について、世界で最も人気のあるバックパッカー観光地の一つであるタイ・チェンマイでのインタビュー調査をもとに考察する。さらに調査結果から、バックパッカーが社会・文化的に悪影響を及ぼす観光客であると批判を受ける根本的な原因も探る。

2. 責任ある観光

2.1 「責任ある観光」の概念とその重要性

観光は人間によって供給され、またそれを消費するのも人間であるという意味において、極めて人間的な活動である。木村(2011)は、観光が人間的営みでさまざまな人間関係が生み出される以上、「何が善であり、何が悪であるのか」という行為に関わる価値判断の問題を問う必要がある、と述べている。つまり、人間の行為に関する善悪の基準を「倫理的規範」として反省する学問である倫理学の考え方を、観光研究にも応用しなくてはならないのである。観光倫理に関する研究は、日本のみならず世界的に見ても他の観光

研究分野と比べて遅れている。今までは、政策的また技術的側面から持続可能な観光開発の議論を続け、利害関係者の倫理的行動および、それが観光の持続可能性に及ぼす影響に関する考察は無視されてきた。Holden (2009) が言うとおりに、政策や技術革新などは持続可能な観光開発に大きく寄与するものであるが、最も重要なのはすべての利害関係者の他者や自然環境に対しての責任ある行動である。

それでは、どのような観光活動の形態が良いものとされ、持続可能な観光開発に貢献できるのだろうか。1999年、世界観光機関 (UNWTO / United Nations World Tourism Organization) によって「世界観光倫理規定」(Global Code of Ethics for Tourism) が策定されてから、世界各地で行政・非政府機関 (NGOs)、またツアーオペレーター等が各利害関係者に対しての倫理要綱を発行している。それらに共通して見られるのは、各利害関係者が自分自身の責任を認識した上で経済・社会・文化・自然環境面に対して好影響を最大化し、悪影響を最小化できる観光活動をとるべきである、ということである。さらに本稿が焦点を当てる観光客の責任ある行動に関して、Stanford (2008) は観光客に対して以下の5点の行動ガイドラインを作成し、それを周知させることの重要性を説いている。

- 地元住民を尊重すること
- 地元住民の生活を乱さないように自分の行動を認識すること
- 観光地の福祉向上のために時間・金銭・労力を費やして博愛的行動 (ボランティア活動・寄付等) に従事すること
- 観光地の草の根レベルでの経済発展に貢献できるように金銭を使うこと
- 自然環境に配慮した行動をとること

さらに、Yakushiji (2010) は、低開発国を旅行するバックパッカーの行動指標が記された38本の倫理要綱の記述内容を分析し、合計22の責任ある行動の具体的指標を表した(表1)。これには、バックパッカーが観光地の社会・

文化的悪影響を与えないよう自分の行動を認識し、行動に移す事を求める指標も含まれている。特定の地域の状況に即していない倫理要綱を責任ある行動の指標として用いることは、地元の文化や風習を無視した倫理的価値観の普遍化であるとの批判がある (Wheeler, 1994)。しかしながら、表1で示されたようにバックパッカーが行動したならば、観光地の持続可能性に少なからずとも貢献できることは事実である。

表1 低開発国を旅行中のバックパッカーの責任ある行動の指標

責任ある行動の側面 (Stanford (2008))	具体的な行動指標
地元住民を尊重する	<ul style="list-style-type: none"> • 他の文化を積極的に理解する • 地元住民の感情を理解する • 文化の多様性を認める • 地元の文化的・社会的また宗教的基準に従う
地元住民の生活を乱さないように自分の行動を認識する	<ul style="list-style-type: none"> • 観光地の法律に従う • 地元住民と非現実的な約束をしない • 地元住民のプライバシーを侵害する写真撮影をしない • 地元住民からの特別なもてなしを期待しない • 行き過ぎた飲酒行動をとらない • 極度な値切りを要請しない • 観光地のドレスコードに従う • 不都合なことがあっても我慢する • 物乞いに金銭を渡さず、貧困削減に努める NGOs に寄付をする
観光地の福祉向上のために時間・金銭・労力を費やして博愛的行動に従事する	<ul style="list-style-type: none"> • 社会的に責任のあるバックパッカー産業従事者 (ツアーオペレーターやゲストハウス等) を利用する • ボランティア活動に従事する • 寄付をする
観光地の草の根レベルでの経済発展に貢献できるように金銭を使う	<ul style="list-style-type: none"> • 地元製の商品を消費する • 地元住民所有の観光施設を使う
自然環境に配慮した行動をする	<ul style="list-style-type: none"> • 無駄なごみを出さない (再利用に努める) • 二酸化炭素排出量削減のため、タクシー・レンタカー等のチャーター交通ではなく、公共交通機関を利用する • 絶滅の危機にさらされた動植物から作られた製品を購入しない • 自然環境に優しい製品を積極的に利用する

出典：Yakushiji (2010)

2.2 「責任ある観光」の限界と問題点

上述のとおり、責任ある行動を取ることは観光客のみならず、全ての観光活動に関わる利害関係者に求められることであり、それが持続可能な観光に貢献するのは確かであろう。しかし、それを現実の観光現象に当てはめようとすると、多くのジレンマが伴うのも事実である。

第一に、観光現象の多様な利害関係者が絡み合う複雑性や国際性は、観光現象における倫理的概念の適用を難しくさせる。Fennell (2006) が言うとおり、加害、不正義や暴力といった行為が文化に関わらず悪として捉えられるように、本質的なモラルは文化に関わらず全ての人間に共通している。しかし、多少なりともこの本質的なモラルは、文化に由来した倫理的特徴を作り上げる基礎となる。つまり、現実世界では何が善であり何が悪であるのかと言う問いは、それに関わる各人が持つモラルに対する枠組み、感情、価値観、またその場の状況が影響を及ぼし、絶対的な答えは無い。歴史、経済、文化、宗教、そして教育的背景が個人レベルでのモラルに対する枠組みを作り出す。この善悪に対する主観性が観光現象における倫理的問題の解釈を難しくさせ、また利害関係者間で誤解や対立を生み出す要因となる。

第二に、ホストとゲストの間に生じる力関係が、観光現象における倫理的概念の適用を難しくさせる。Fennell (2008) が「観光客は『権利』と『自由』を主張し、『義務』と『責任』は他の利害関係者に押し付ける傾向がある」と言うように、観光客はもてなされる側として他の利害関係者と比較して強い力を持っている。多くの観光客は、日常の責任を非日常世界の観光地で忘れることを目的に観光活動を行い、旅行中は日常の束縛から解放された感覚に陥る。これが、観光客が旅行先の社会や人々に対して無礼な行動を無意識にもとってしまう一因であり、多少の羽目を外した行動も許されるという甘えの考えにつながる(木村, 2011)。この観光客の好ましくない行動を受けて、また持続可能な社会の構築に対する風潮に伴って、欧米のメディアを中心に、観光客も旅行中に前述の Stanford (2008) によって示されたような行動を

とる必要があることを広く一般市民に訴える動きがある。しかし、これに影響を受け旅行中の行動を実際に変えるのは、高学歴・高収入な中年女性に代表されるごく一部のグループのみであり、責任ある観光を隙間産業として商業化させるにすぎない、との批判もある (Weeden, 2005)。さらに、Butcher (2003) が指摘するように「観光の道徳化」(moralisation of tourism) は、観光地の関係者が非日常世界を観光客に提供し、経済的利益を得ることで成り立つ観光システムそのものと矛盾する。責任ある観光行動を観光客に押し付けると、観光地にとっては客離れの原因となることも考えられる。ホストとゲストの間に生じる不均衡な力関係の構造が改善されない限り、観光現象における倫理的概念の適用は無駄に終わるかもしれない。

そもそも、観光客に対して責任ある行動を求める考え方そのものに矛盾点があるのも事実である。表2で示すように、観光倫理の考え方には「義務論」的考え方と「目的論」的考え方がある。義務論は観光客に対して、倫理的主体たるひとりの人格として厳格な倫理的原則に依拠した「善なる行為」を求める。つまり、倫理的行為は人間の義務であるとみなす。責任ある観光の概

表2 観光倫理の考え方：「義務論」と「目的論」

義務論 [Deontology]	目的論 [Teleology]
<ul style="list-style-type: none"> 人間の正しい行いとは何かを原理的に考えようとするもの 倫理的行為 = 人間の義務 	<ul style="list-style-type: none"> 「正しい行い」を規定することなく、どの様なことであれその人にとって最善の可能な結果を追求しようとするもの 快楽主義（個人の最大の快楽に関心を向ける）と功利主義（最大多数の最大幸福を求める）が含まれる
<ul style="list-style-type: none"> 観光客は観光客である前に、倫理的主体たるひとりの人格として厳格な倫理的原則に依拠した「善なる行為」を求められる 	<ul style="list-style-type: none"> 観光客は自己の快楽や自分が所属する共同体の利益のために、他の人間や生命に対して非倫理的な態度を取る可能性を有する事を認める（現代の資本主義社会では、法に背かない限り利己的行為は是認される）
<ul style="list-style-type: none"> 観光倫理の概念と持続可能な観光開発の概念に合致する 	<ul style="list-style-type: none"> 現代の観光現象に支配的な概念 持続可能な観光開発の概念に反する

出典：木村（2011）

念は、義務論的思考を前提としていると言えよう。一方、目的論は観光客に対して何が「正しい行い」なのかを規定することなく、どの様なことであれその人にとって最善の可能な結果を出せば良いと考える。つまり、法に背かない限り、観光客は自己の快楽や自分が所属する共同体の利益のために、他の人間や生命に対して非倫理的（利己的）な態度を取る可能性がある事を認める考え方である。前述の、観光客に広がる多少の羽目を外した行動も許されるという甘えの考えは、明らかに目的論的な自己正当化された考えである。Smith（2009：271）は、人間の倫理的行動の本質について、「倫理観に適合する能力が、個人が個人として構成されるために不可欠な要素である。その能力の度合いは、生物学的側面と他者との社会的関係性との間のデリケートな関連の中で、またそれを通して決定付けられる。その能力が影響して、またそれだけが影響して、人々は自分の自己中心的な悪い傾向を隠すために、社会に広がる倫理観を自己中心的で可能な方向に（それはほとんどの場合簡単な方向に）歪曲しようとするのである。」と論じている。さらに「私たちの自己中心性は、道理をわきまえるために必要なアイデアであり、またそれが理想とされるものでもある」とも論じている（Smith, 2007：272）。このような事を考慮すると、本稿が研究目的とするバックパッカーの責任ある行動に対する表現も、目的論的な自己正当化された表現であると考えられよう。

3. 低開発国におけるバックパッカーの旅行経験と行動

現代のバックパッカー観光は大衆化・商業化され、より手軽で快適なものに変化してきている。インターネット及びクレジットカードというポストモダン時代を代表する主要な発明品と、それらの恩恵を預かって台頭した格安航空会社が、現代のバックパッカー観光をより手軽に、また快適なものにし、それが大衆化を推し進めた（Shaw and Williams, 2004）。Ritzer and Liska（1997）は、現代の観光客の観光行動パターンは予測可能で効率的であり、

それはマクドナルドやディズニーなどによる計算尽くされたマーケティング戦略に動かされる消費行動と似たものであることから、観光行動パターンは“Mc Disneyfication”化していると言うが、これはバックパッカーにも当てはまる。現代のバックパッカーは Lonely Planet や「地球の歩き方」などのガイドブックからの情報のみならず、ソーシャルネットワークサイトの Facebook や旅行情報サイトの Trip Adviser や「フォートラベル」での口コミ情報（観光地の最新情報やゲストハウス・レストランの評価等）なども巧みに収集し観光行動に反映させる。この情報に左右された観光行動は、彼(女)らの行動パターンを規定させるものである。さらに、バックパッカー観光の大衆化・商業化と比例して、バックパッカー観光の性格そのものが教育的側面から娯楽的側面を強調したものに变化してきている。Plog (1974) の認識・規範モデル (cognitive-normative model) で示されるように、本来バックパッカーはマストゥーリストが行うような組織化された観光を嫌い、その性格はマストゥーリストに代表される観光地においても居心地の良い環境 (tourist bubble) を追い求めるサイコセントリックな観光客 (psychocentric tourist) ではなく、積極的に地元住民との交流を行い、異文化への理解を示すアロセントリックな観光客 (allocentric tourist) であると区別された³⁾。このアロセントリックな観光客に含まれるバックパッカーの多くは、教育を受けた高所得民の子供（主に18歳から25歳程度）であるとされ、彼(女)らの観光活動は英国ビクトリア朝時代に行われた大人への通過儀礼として教育的側面を強調したグランドツアー (Grand Tour) に似ていた。しかしながら、現在ではバックパッカー観光の大衆化が進んだ結果、4S's (sun, sand, sea, sex) に代表される自己の快楽を追求するマストゥーリストと類似した行動を取るバックパッカーが増えたと言われている (Shaw and Williams, 2004)。それでも旅行前の計画や旅行中の移動、トラブル対処など自発的に動く必要があり、自由旅行としての本質は同じである。

低開発国におけるバックパッカーの観光行動は、身体的また心理的に旅行

先の環境に適合することの難しさや、現地での悪い経験、それらに続くネガティブな心理状態が強く影響すると考えられる(図1:旅行中の身体的・心理的状态参照)。大多数のバックパッカーは、最初の目的地到着後すぐにその土地の文化や風習、自然環境に慣れることや、何かしらの予期せぬ困難(例えば地元住民からの奇妙なまなざしや、セクシャルハラスメントなど)がストレスとなり、またそれに困惑する(Hottola, 2004)。それは、人によってはその先の旅行動機や行動に強い影響を及ぼす。この経験に対する身体的・

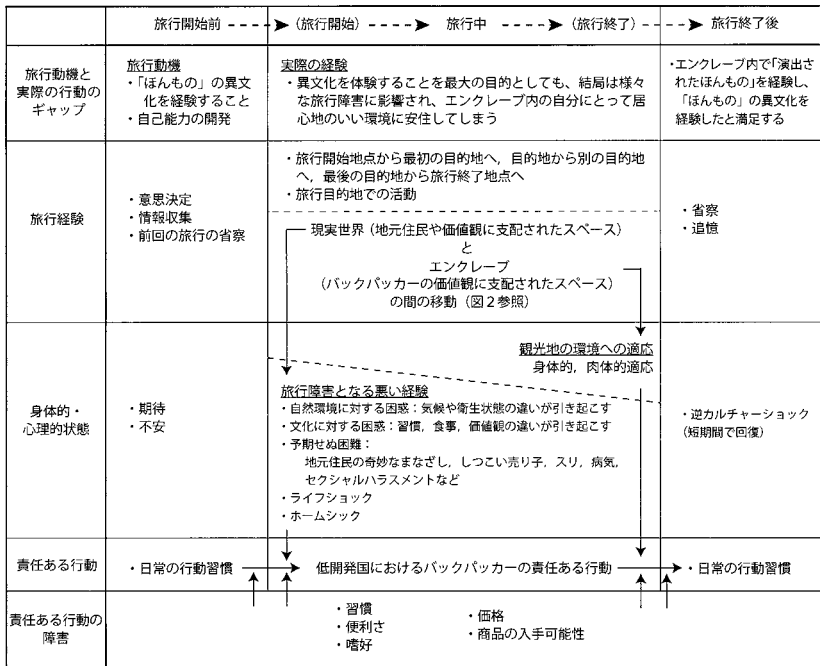


図1 低開発国におけるバックパッカーの身体的・心理的状态、旅行動機、旅行経験と(責任ある)行動

注: 直線矢印は低開発国を旅行中のバックパッカーの責任ある行動に及ぼす影響を示す
 出典: Baum (2002), Goodwin and Francis (2003), Hottola (2005), Pennington-Gray, et. al. (2005), Budeanu (2007), Wilson and Richards (2008)

心理的ストレスの程度は人それぞれであるが、バックパッカーは他の観光客と比べ旅行先の生の環境との接触機会が多いため、より強いストレスを受けるとされる。さらに、不衛生や貧困など、自国では社会的セキュリティや施設などで隠されている人間の生活における好ましくない実態を目の当たりにすることによって、非常に強い衝撃を受ける。日常生活から離れて組織化されたバックパッカー現象の中で「ほんもの」の経験をし、異国情緒を楽しむ事を目的とした現代のバックパッカーにとって、時には対処できないほどの衝撃となり得る。Hottola (2004) は、この衝撃をライフショック (life shock) と名付けている。

このような異文化世界に対する困惑や衝撃はバックパッカーにとって大きな旅行障害ではあるが、実際には彼(女)のほとんどは現実世界(地元住民の価値観や風習が支配している空間)とエンクレーブの間を行き来することによって身体的・心理的にコントロールし、旅行を成功させるのである(図1:旅行中の旅行経験および図2参照)。エンクレーブは、異国の地にありながらバックパッカーの文化に支配され、彼(女)らが自分自身をコントロールできる場所である。それは、バンコクのカオサンロードに代表されるバックパッカー産業施設が密集した空間や、ホステル、ゲストハウス、バックパッカーをターゲットにしたレストランなども該当する。たとえ現実世界に浸り異文化を体験しようとする強い旅行動機を抱いていたとしても、実際には上述の様々な旅行障害から、このエンクレーブ無しには旅行が成り立たない。ある程度は異文化体験が出来るかもしれないが、同時に現実世界からのストレスに疲れきってしまい、エンクレーブに引きこもってしまうのである(Hottola, 2005)。バックパッカーは、旅行中のほとんどの時間をこのエンクレーブで過ごし、実際の旅行は一つのエンクレーブから他のエンクレーブへの旅行であると言っても過言ではない(Cohen, 2003; Wilson and Richards, 2008)(図1:旅行動機と実際の行動のギャップ参照)。それ故に、「出会い」を求める傾向がある彼(女)らにとって、出会う対象は現実世界の地元住民

よりも他のバックパッカーやバックパッカー産業従事者である場合が圧倒的である。このようなことから、本稿が研究対象とするバックパッカーの責任ある観光行動の対象は、現実世界の地元住民ではなく、利害関係者間で比較的強い力を持ち、バックパッカーの文化を理解しているバックパッカー産業従事者ではないかと推測される。

上述の通り、バックパッカーの行動パターンはエンクレーブ間の移動にもとづくものであり、「ほんもの」の経験を通して異文化を理解することを最大の旅行目的としても、結局はマストゥーリストと同様にエンクレーブ内の自分にとって居心地のいい環境に安住してしまう傾向にある (Wilson and Richards, 2008)。それでも彼(女)らは、わずかで一時的な地元の文化や地元住民との出会いを「ほんもの」の経験をしたと過大評価し、自分自身は異

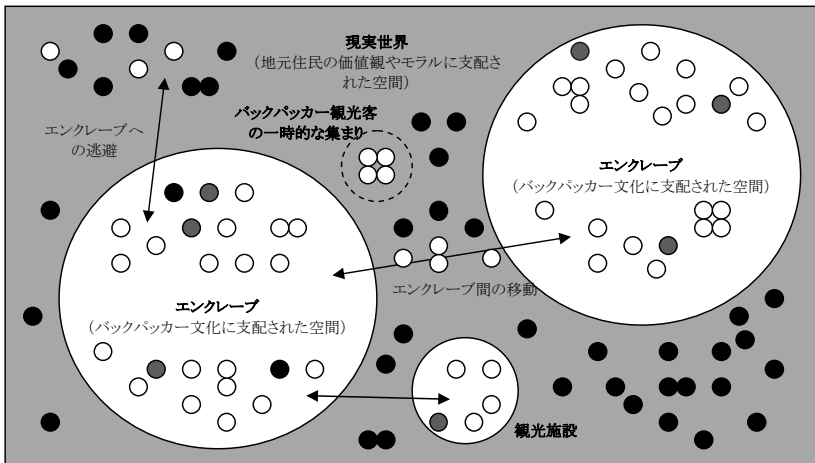


図2 低開発国におけるバックパッカー観光のエンクレーブと現実世界

- 注: ●: 地元住民
 ●: バックパッカー産業従事者 (ゲストハウススタッフ, レストランスタッフ, ツアーガイドなど)
 ○: 先進国からのバックパッカー

出典: Hottola (2005)

文化を理解しているのだと自信を示す。実際は痛感しているホストとゲストの関わり合いの難しさは、このわずかで一時的な出会いによって緩和され、ホストとゲストの関係は良いという錯覚に陥るのである (Huxley, 2004)。この自信は、世界旅行者 (cosmopolitan world traveller) であると自負するバックパッカーが持ち得る「美的な世界主義」(aesthetic cosmopolitanism) (Urry, 1995) に影響を与える。つまり、自分自身には可動性、好奇心、寛大さ、順応性があり、社交的で、さらに「違い」を消費する事を要求し、それを喜ぶ有能な観光客であるという自信を生み出し、それが異文化に対する美的な解釈や異文化世界に対する倫理的価値観を形成する上で重要な要因となるのである (Molz, 2006)。さらに、自分たちも実際はそうであるにもかかわらず、観光地においても自分自身の居心地の良い空間に安住するマストゥーリストを見下す。この反「観光客」的態度は、バックパッカーとしてのアイデンティティーや、他者と比べ優位性を確認した上で得られる異文化理解に対する自信を生み出す (Welk, 2004)。

4. 低開発国におけるバックパッカーの責任ある行動

ータイ・チェンマイでの事例研究ー

4.1 観光都市チェンマイ

本研究の調査実施場所であるチェンマイがあるタイは、バックパッカーにとって最も人気のある国の一つである。Lonely Planet (2006)がバックパッカー旅行経験者に対して行った調査によると、「今まで訪れた国の中で好きな国は?」という質問で3位(1位:オーストラリア, 2位:イタリア)、「次の旅行で訪れたい国は?」という質問で5位(1位:オーストラリア, 2位:アメリカ合衆国, 3位:ニュージーランド, 4位:イタリア)であった。年間100~130万人がバックパッカーとして東南アジアを訪れると推測され、その大半がタイを主要な目的地として訪れると考えられている (Hampton,

2009)。タイがバックパッカーをひきつける理由は以下の7点が挙げられる：

- 「美」(美しいビーチ・美しい自然等)
- 豊富な文化資源(寺院・歴史遺産・食事・伝統芸能等)
- 「微笑みの国」としてのイメージ
- 東南アジアの入り口としての便利さ
- 確立されたバックパッカーインフラの存在(ゲストハウス・ツーリストバー・ツアーバス等)
- 物価の安さ
- 気候(観光の季節性が無い)

確立されたバックパッカーインフラの存在は、第3章での考察の通り、それらの存在が旅行成功の鍵となるため、バックパッカーをひきつける重要な要因である。

チェンマイはタイ北部の中心都市(図3)であり、その豊かな文化資産や郊外に広がる自然環境は世界中から観光客をひきつける。バックパッカーはチェンマイに滞在中、寺院、ナイトマーケット、ナイトサファリを見学することのみならず、郊外へのトレッキングツアーや少数民族村への訪問などを行う。バンコク・カオサンロードのようなバックパッカー産業密集地区は存在しないものの、市中心部のいたるところにゲストハウスやインターネットカフェ、ツーリストバーなどが存在し、バックパッカーインフラは確立されているといえる。チェンマイは、タイ、カンボジア、ベトナム、ラオスにまたがるインドシナ半島周遊ルート上に存在し(図3)、周遊旅行の中継地点としても重要な役割を果たす。特に、近年秘境として人気のあるラオスの古都・ルアンパバーンを陸路で目指すバックパッカーにとっては、バスとメコン川のボートを利用して二日かかる行程の出発地点としての役割も果たしている。



図3 チェンマイとインドシナ半島バックパッカー旅行ルート
(筆者作成)

4.2 研究方法

本研究は、バックパッカーの責任ある行動に対する認識と自己評価についてタイ・チェンマイでのインタビュー調査をもとに考察する。さらに、そこからバックパッカーが社会・文化的に悪影響を及ぼす観光客であると批判を受ける根本的な原因も読み取る。この研究目的を達成するため、タイ・チェ

ンマイを旅行中のバックパッカー、合計14名（2名グループ×5、単独（1名）×4）にインタビュー調査を行った。調査を行った期間は、2008年4月および5月であり、これはタイにおけるバックパッカー観光のピーク期の終わりからオフピーク期の始まりにあたる。インタビューはチェンマイ市内の3つのゲストハウスのレストランで行い、被験者は全員これらのゲストハウスの宿泊客である。被験者の国籍は、カナダ（4名）、イギリス（3名）、ドイツ（2名）、およびニュージーランド、オランダ、フランス、アメリカ合衆国、オーストラリア（各1名）である。平均年齢は23.5歳で、男性4名に対して女性が9名である。14名中13名が大学学部課程在籍者または学位保持者であり、高度な教育を受けた人が被験者の大半であると解釈され得る。これらのデータは過去のバックパッカーに対する研究で得られた被験者の社会的属性とはほぼ一致するものであり、本研究の被験者は「典型的な」バックパッカーであると言える。被験者のチェンマイ滞在時一日平均の出費は、500タイバツ以下が7名、500から750バツが4名である。2008年の時点で、タイ（ただしバンコク以外）をバックパッカーとして旅行するのに必要な経費が1日あたり500バツである（Lonely Planet, 2008）⁴⁾ことを考えると、被験者はおおよそ平均的な旅行をしていると言えよう。しかしながら、被験者のバックパッカー旅行経験数の平均は2.36回であり、数の面からのみ見ればそれほど多くの経験を積んでいるとは言えない。

Jennings (2005) によると、質的調査においては「いくつのサンプルを集めるべきか？」ではなく、「いつ一連のインタビュー調査を終了すべきか？」が大事であり、被験者の発言内容に法則性と類似性が見出せると判断したときが全調査の終了時期である。本研究では、インタビュー調査のサンプル数14は少ないとの批判を受けるかもしれないが、14番目の被験者に調査を行った時点で発言内容の法則性と類似性が見出せたため、調査を終了とした。

インタビュー調査にはいくつかの手法があるが、本研究では半構造化インタビュー（semi-structured interview survey）を選択した。これは、事前

に大まかな質問事項を設定しておき、研究者が被験者の回答をより詳しく知る必要を感じれば、詳細を尋ねていく手法である。被験者はある程度自由に話題を展開することが出来る一方、研究者は被験者をコントロールすることもある程度可能である。そのため、本研究が行う観光客へのインタビュー調査のような、被験者へ長時間の調査を行うことが困難な場合に有効な手法である。インタビュー調査での質問は、基本的質問（年齢・国籍等の社会的属性や、旅行動機、旅行ルートなどについて）に加え、以下の5点である：

- 自分自身のバックパッカーとしての行動をどのように評価するか
- 他のバックパッカーの行動はどのようなものであるか
- タイにおいて、どのようなバックパッカーの行動が「責任ある行動」であると思うか
- タイを旅行中に「責任ある行動」をしたと思える瞬間はどのような場面であるか
- タイを旅行中に「責任ある行動」をすることは難しいと思える瞬間はどのような場面であるか

全ての質問において、なぜそのような思うのかについても尋ねている。

4.3 研究結果と考察

4.3.1 バックパッカーの責任ある行動に対する認識

Fennell (2006) は、認識とモラル的枠組みがどんな状況であれ人々が倫理的に振舞うための前提条件である、と説明している。つまり、もし人々が自分自身の行動に対してそれは倫理的であると評価するのなら、そこには「良い行動」に対する知識や認識が伴うはずである。そこで、ここではどの程度バックパッカーは責任ある行動の重要性を認識しているかを考察する。

被験者のインタビュー調査での発言を概観すると、彼（女）らの責任ある観光に対する知識は、バックパッカーに対して作成された倫理要綱に記述されているような内容と多くは一致することが分かった。例えば数名の被験者

は、タイをはじめとした低開発国において、バックパッカーは積極的に地元生産の商品を消費したり、ゲストハウスやレストランなどの地元住民所有の施設を利用したりすることによって、草の根レベルでの経済貢献をしなくてはならない、と発言した。逆を言うと、輸入商品の消費や多国籍企業の施設を利用することは、金銭が国外へ流出するのを防ぐために控えるべきであるということである。Hampton (1998) は、バックパッカーは他の観光客と比べて一つの観光地に長く滞在する上、地元所有の観光施設やレストラン、交通機関等を利用するため、彼(女)らの支出が地域内にとどまることを証明している。

さらに、数名の被験者は多くの倫理要綱に記載されているとおり、物乞いに金銭を直接渡すことは控え、NGO やチャリティー機関等へ寄付すべきだと以下のように発言した：

「物乞いに金銭を渡すと、それは誤った方法で使われるかもしれない。NGO やボランティア組織、孤児院などに寄付し、適切な方法で使われるようにするにはいけない。不適切な方法で使われる事を、バックパッカーは助長させてはいけない。」(オーストラリア人・25歳男性)

「インド・デリーのバックパッカーが集まる地区に滞在していたとき、地元住民から物乞いの子供には金銭を渡すなど言われた。その多くは麻薬中毒者であり、もし直接金銭を渡したなら間違いなく麻薬に使われるであろう。NGO やチャリティー機関に寄付をしたほうが、直接物乞いに金銭を渡すよりも良い方法で使われるはずである。」(イギリス人・23歳男性)

これらの発言が示すとおり、バックパッカーの責任ある行動に対する知識はまるで教科書どおりの知識のようなものであり、自分自身が責任ある行動を取らなくてはいけない事を認識していると解釈される。被験者の14人中13

人（92.9%）は、バックパッカーに向けた倫理要綱や、ガイドブックに記載されている責任ある行動に関する記述を読んだことがあると発言した。

4.3.2 バックパッカーの責任ある行動に対する自己評価

自分自身のバックパッカーとしての行動をどの様に評価するかを尋ねたところ、ほとんどのバックパッカーは、以下に示すように自分自身は「責任ある」観光客であると主張した：

「ほとんどのバックパッカーは観光地の文化を理解しようとし、また現地言葉も学ぼうとしている。タイ、特にチェンマイには料理教室やマッサージ教室があり、学ぶことがたくさんある。皆、自分自身の方法で文化を学び、同時に飲酒も含めて色々なことを楽しんでいる。バックパッカーの旅行動機の70%は学習であり、残りの30%がエンターテイメントである。」（オーストラリア人・25歳男性）

「自分の経験から言うと、時間をかけて焦ることなく観光地の文化を見て回り、色々なことを学ぶから、バックパッカーは他のタイプの観光客よりも倫理的である。そして、一度地元のことを学んだら、もっと責任ある方法で旅行をしなくてはいけないことに気づかされるはずである。」（アメリカ人・25歳男性）

「一般的には、バックパッカーはどのような方法で責任ある行動をとるか、どのようにして良い時間を過ごすか、どのような行動が地元住民や他のバックパッカーにとって無礼であるかなどをよく理解している。だから、バックパッカーは本当に良い観光客だと思う。そして、自分たちは典型的なバックパッカーである。例えばインドとかネパールでは、地元住民がごみをどこにでも捨て、美化環境に大きな問題があることに気づかされた。そこで私たちは、結局はそこにたまるだけであり根本的な解決にはならないから、たとえ道端にごみ箱があったとしても自分で出

したごみは持ち帰るようにした。」(イギリス人・23歳男性)

前項では、バックパッカーは責任ある行動の重要性を認識していることがわかった。認識が実際の責任ある行動につながり、その結果、被験者が自分自身の行動に対して高評価を下したことは事実であろう。しかし、これら全ての被験者の発言を考察すると、自分自身には可動性、好奇心、寛大さ、順応性があり、社交的で、さらに「違い」を消費する事を要求し、それを喜ぶ有能な世界旅行者であるという自信がうかがえる。Molz (2006) が説明するとおり、この世界旅行者としての自信は、自分自身の倫理的行動に対する解釈や評価に大きく影響するものである。

4.3.3 バックパッカーの責任ある行動に関する矛盾

前項で示された、責任ある行動に対する認識や自分自身の行動に対する高評価とは裏腹に、バックパッカーは異文化や日常とは異なる自然環境に対して様々な形で困惑し、それが時には責任ある行動に影響していることも事実である。これらの困惑の多くは、エンクレーブの外の現実世界(図2参照)で引き起こされるものである。その内容は Hottola (2004) が示した低開発国におけるバックパッカーの旅行障害要因と同じで、異なる自然環境や文化に対する困惑、さらに予期せぬ出来事(犯罪被害やセクシャルハラスメント等)などである(図1:旅行中の身体的・心理的状態参照)。例えば、北半球の冷帯地域から来た先進国のバックパッカーにとっては、タイの暑さは耐えられないものであり、それが地元住民にとって好ましくないドレスコードを取ってしまう要因であると、ある被験者は以下のように発言した:

「北部の町の寺院に行く時には長袖の服を着なくてはいけないという事を、タイに関する本を読んで知った。しかしここはとても暑く、40度の天候の下長袖を着るのは寒いカナダで育った私にとってはとても難しい

ことである。」(カナダ人・20歳女性)

さらに別の被験者は、バックパッカーが東南アジアでしばしば経験する地元の商売人に騙されることが地元住民に対する不信につながり、地元住民を尊重する事を難しくさせる要因になると以下のように発言した：

「地元住民を尊重しようとはしたけれども、それには時々困難が伴う。私たち西欧人は金を持っており、地元住民はそんな私たちから金を巻き上げるために騙そうとする。それに対して、それは良くないことだとユーモア交じりに注意し、穏やかでいることは難しい。もしこれが一日五回続いたら、旅行自体が面白くないものになる。」(ドイツ人・19歳女性)

甘えや諦めの気持ちなども、バックパッカーにとって責任ある行動をとる事を難しくさせる。例えば、ある被験者はタイで行き過ぎた飲酒行動を取ってしまいやすい事について以下のように発言した：

「ここはアルコールの値段がとても安い。一杯のビールがオーストラリアの3分の1の値段で飲める。つまり、3倍のビールが飲めてしまう。」(オーストラリア人・25歳男性)

さらに別の被験者は、地元の言語を少しでも習得し喋ることは、地元住民を尊重する意味でも必要であり、それは責任ある行動の一つであると考えているが、実際には言語習得の難しさと怠け心は、言語を習得することの重要性に対する認識・意図と実際の行動のギャップを生み出す、と説明した：

「例えば、インドやネパールに居たとき「こんにちは」や「ありがとう」程度しか喋らなかった。それだけでは十分だとは言えない。事実、ほと

んどの人が英語を喋り、それが言語を習得することに対しての怠けにつながった。もし、英語が十分に喋れずに地元住民とコミュニケーションが十分に取れなかったら、現地語を基本的なフレーズだけでも習得しようとしたかもしれない。怠けてしまうことは良いことだとは思わない。」(イギリス人・23歳男性)

バックパッカーは自分自身を責任ある観光客であると評価するにもかかわらず、実際にはバックパッカー文化に支配され、自分にとって居心地の良いエンクレーブの外では様々な旅行障害に悩まされ、責任ある行動をとれずにいる。バックパッカーにとって、エンクレーブは旅行を遂行する上で極めて重要な空間である。次項で考察するとおり、そこでの経験は自分自身の責任ある行動に対する解釈に大きな影響を及ぼしている。

4.3.4 エンクレーブと責任ある行動

自分自身の責任ある行動に対する被験者の発言を考察すると、バックパッカーが責任ある行動を行うことが出来る空間は、バックパッカー文化に支配され自分自身にとって居心地が良く、それゆえに自分自身の心理状態をコントロールすることが出来るエンクレーブであると考えられる。バックパッカーを対象にしたレストランやゲストハウスなどのエンクレーブ内では、現代の大衆化・商業化されたバックパッカー現象と連動して、バックパッカーの嗜好にあわせたサービスの提供が行われている。バックパッカーは安全の確保されたエンクレーブ内で安心して異文化体験を行い、そこでの経験は責任ある行動に対する解釈に大きな影響を及ぼしている。

ある被験者は、地元の草の根レベルでの経済発展のためにバックパッカーは地元生産の商品を消費し、地元住民所有の施設を積極的に利用することは大切であると発言した。さらに、地元住民所有のゲストハウスやレストランなどがバックパッカーにとって安全で洗練されたサービスを供給してくれる

から、その責任ある行動は簡単に行えると以下のように述べた：

「マクドナルドのような大規模チェーンレストランで、西洋料理を食べる必要は無い。通りを歩いていると、素晴らしい地元所有の小規模レストランが沢山ある。小規模レストランでは誰がどんな食材を使って料理しているかわかるし、料理人の意思が尊重されやすい。特にタイにはそのような店が沢山あり、選択の余地が沢山ある。宿泊施設に関しても同様で、素晴らしいゲストハウスは沢山あり、大規模チェーンホテルに泊まる必要は全く無い。さらに、トレッキングツアーで同行するツアーガイドは地元住民である。バックパッカーは彼らから多くの知識を得るし、彼らはバックパッカーから経済的利益を得る。とにかく、地元の経済に貢献することは、洗練されたサービスを選択する余地が沢山あるから簡単である。」（イギリス人・22歳男性）

さらに、バックパッカーは地元の文化に一時的に触れたり、好ましいと自分自身で解釈する行動を一時的に取ったりするだけで、自分は責任ある観光客であると自信を示す傾向にある。例えば多くの被験者は、タイ料理やタイマッサージのクラスに参加し、一時的にエンクレーブ内で異文化を体験しただけで、それは責任ある行動であると評価した（4.3.2：オーストラリア人・25歳男性の発言を参照）。「ほんもの」の経験を通して異文化を理解しようとする理想的な旅行目的と、結局は様々な旅行障害からマストゥリストと同様にエンクレーブ内の自分にとって居心地の良い環境に安住してしまう現実との矛盾の中で、一時的に「演出されたほんもの」(staged authenticity)を経験するのみで、それは真に「ほんもの」の経験であると評価され、それが自分自身の責任ある行動に対する自信につながるのである。これは、第3章で解説した Huxley (2004) の異文化理解能力に対する自己正当化プロセスと関連する。

4.3.5 バックパッカーとしてのアイデンティティーと責任ある行動

自分自身の責任ある行動に対する被験者の発言を考察すると、バックパッカーとしてのアイデンティティーから派生される優位性が、バックパッカーの責任ある行動に対する正当化プロセスに影響したと考えられる。

旅行することそれ自体に意味を見出そうとし、それを軸としてバックパッカーとしてのサブカルチャーやアイデンティティーを形成することは、彼(女)らの大きな特徴である(Pearce, 2005)。アイデンティティーを維持するために、バックパッカーは自分自身を他のタイプの観光客と区別した上で反「観光客」的態度を示し、また見下すことによって自分自身の優位性を確認する(Welk, 2004)。これと関連し、多くの被験者は他者(特にマストゥーリスト)と自分自身を比較した上で、自分の責任ある行動を正当化した。以下の被験者の発言は、バックパッカーは責任ある観光客であるとの主張に対する理由である：

「一般的にバックパッカーは、異文化を経験するためにここに来ている。特にタイに多いセックストゥーリストと比べたら、この傾向は顕著である。」(イギリス人・23歳男性)

「バックパッカーは、観光地に最も悪影響を及ぼさない観光客である。特にマストゥーリストと比べたら、この傾向は顕著である。」(カナダ人・20歳女性)

さらに別の被験者は自分自身の責任ある行動を主張するため、パーティーを中心としたエンターテイメントを楽しむ事を主要な旅行動機とした快樂主義的なバックパッカーと、自分自身を含む異文化理解を目的としたバックパッカーを以下のように比較した：

「バンコク・カオサンロードに居た時、多くの滞在者は1-2週間のど

んちゃん騒ぎを楽しむために来ていることに気づかされた。カオサンロードを歩いていると、誰が『休暇』(holiday)を楽しむために来ているのか、また誰がバックパッキングを楽しむために来ているのかを区別することが出来る。」(イギリス人・22歳男性)

5. おわりに

本稿は、バックパッカーの責任ある行動に対する認識と自己評価について、世界で最も人気のあるバックパッカー観光地の一つであるタイ・チェンマイでのインタビュー調査をもとに考察した。さらに調査結果から、バックパッカーが社会・文化的に悪影響を及ぼす観光客であると批判を受ける根本的な原因も探った。

調査の結果、バックパッカーは責任ある行動の重要性を認識し、また自分自身は責任ある観光客であると自信を示すことがわかった。バックパッカーの責任ある行動に対する知識はガイドブックや倫理要綱に記載されている内容とほぼ一致し、まるで教科書どおりの知識のようなものであった。この認識が実際の責任ある行動につながり、その結果、被験者が自分自身の行動に対して高評価を下したことは事実であろう。バックパッカーは、世界旅行者として自分自身には可動性、好奇心、寛大さ、順応性があり、社交的で、さらに「違い」を消費する事を要求し、それを喜ぶ有能な世界旅行者であるという自信をみせた。この世界旅行者としての自信はバックパッカーが持ち得る「美的な世界主義」に影響を与え、自分自身の倫理的行動に対する解釈や評価に大きく影響するものである。

しかしながら、バックパッカーが責任ある行動を取ることが出来る空間は、バックパッカー文化に支配され自分自身にとって居心地が良く、それゆえに自分自身の心理状態をコントロールすることが出来るエンクレーブのみである。言い換えるなら、エンクレーブの外の現実世界（地元住民の価値観に支

配された空間)では、バックパッカーは自然環境や文化に対する困惑、予期せぬ困難に見舞われる。このような様々な旅行障害は、彼(女)らの責任ある行動を阻害する。責任ある行動の重要性は認識しているものの、エンクレープ外では認識の通りに行動することが出来ない。つまり、認識と実際の行動にギャップが生じているのである。それでも、「ほんもの」の経験を通して異文化を理解しようとする理想的な旅行目的と、結局は様々な旅行障害からマストゥーリストと同様にエンクレープ内の自分にとって居心地の良い環境に安住してしまう現実との矛盾の中で、タイ料理やタイマッサージのクラスに参加するなどして一時的に「演出されたほんもの」を経験するのみで、それは真に「ほんもの」の経験であると評価した。さらに、「ほんもの」の経験をした自分は責任ある観光客であるとの正当化につながった。エンクレープでは、現代の大衆化・商業化されたバックパッカー現象と連動して、バックパッカーの嗜好にあわせた様々なサービスの提供が行われている。バックパッカーは安全の確保されたエンクレープ内で安心して異文化体験を行うことができ、それに大満足してしまうのである。エンクレープは、バックパッカーが異文化世界での旅行を成功させるために必要不可欠な空間である。しかし同時に、バックパッカーがエンクレープの外の現実世界で「郷に入れば郷に従え」の精神で責任ある行動をとるように努力する事を妨げる要因でもある。その精神の重要性を認識することのみにとどまり、現実世界で認識どおりに行動する努力はしていないのである。これは、バックパッカーが社会・文化的に悪影響を及ぼす観光客であると批判を受ける一要因である。

さらに、バックパッカーとしてのアイデンティティーから派生される優位性も、バックパッカーの責任ある行動に対する正当化に影響をおよぼす。バックパッカーは自分自身を他のタイプの観光客と区別した上で反「観光客」的態度を示し、また見下すことによってバックパッカーとしてのアイデンティティーを築き上げる。それが、自分自身の優位性や倫理性を確認させる要因であり、自分自身の責任ある行動の正当化に導かせる要因でもある。

最後に、大衆化・商業化された現代のバックパッカー現象との係わり合いで形成されているエンクレーブの存在と、バックパッカーとしてのアイデンティティの形成は、責任ある行動に対するバックパッカーの解釈に多大な影響をおよぼしている。さらに、バックパッカーの経験や行動を考察する場合、大衆化・商業化された現代のバックパッカー現象を考察すること無しには理解し得ないのである。

注

- 1) エンクレーブ (enclave) とは、英語で「飛び地」を意味する。バックパッカー観光におけるエンクレーブ (バックパッカーエンクレーブ) とは、カオサンロード (バンコク) やタメル (カトマンズ)、キングスクロス (シドニー) など、バックパッカー観光客が集まる地区のことを指す。このような地区では、ゲストハウスやホテルなどの安宿、ツアーリストバーや旅行代理店が集積している。それ故に、地元の文化ではなくバックパッカーの文化に支配され、無国籍な空間を形成する。
- 2) バックパッカー観光に関する具体的な統計データは、国家レベルでそのマーケットを重要視しているオーストラリアとニュージーランドを除いては存在しない。推測では、バックパッカー観光客は世界中の全観光客の10%ほどを占めるとされている (Butcher, 2003)。その多くはイギリスとドイツを中心とした西ヨーロッパ諸国出身者である。
- 3) Plog (1974) は、なぜ一部の観光客は航空機移動を伴った観光活動をしなかったかという点に着目し、アメリカ人を対象に性格と旅行行動の関連性を調査した。その結果、観光客を以下の3つのタイプに分類した：
 - サイコセントリックな観光客 (psychocentric tourists) : 自己中心的で保守的な行動が日常生活に見られ、日常生活の小さな問題にこだわる傾向がある。観光活動においても保守性が見られ、安全で居心地の良い場所に安住する。自分の好みの観光地 (多くの場合、航空機移動を必要としない近距離のリゾート地や保養地) を見つけたら、そこを繰り返し訪れる。低所得者層に多く見られる。
 - アロセントリックな観光客 (allocentric tourists) : 日常生活においても、また観光活動においても目新しいものを追い求め、冒険心にあふれる。異文化を探索し、見識を広げることを好むため、一度訪れた観光地には滅多に戻らない。アジア・アフリカなど、航空機を使った長距離旅行を積極的に行う傾向がある。高所得者層に多く見られる。
 - ミッドセントリックな観光客 (midcentric tourists) : 上記二つのタイプの観光客の中間に位置し、大多数の観光客はこれに属する。

- 4) これには、基本的な食事、ゲストハウスの宿泊料と市内観光の交通費が含まれるが、酒代、長距離移動の交通費、ツアー参加費などは含まれていない。1 タイパーツ = 2.53円 (2011年11月現在)

引用文献

- 木村勝彦 (2011) 「観光と倫理」長崎国際大学人間社会学部国際観光学科編『観光の地平』学文社, 23-31.
- 藤巻正己 (2009) 「他者理解の旅へーよりよきツーリストを目指してー」(藤巻正己・江口信清編著『グローバル化とアジアの観光ー他者理解の旅へー』ナカニシヤ出版), 231-239.
- Baum, T. (2002) Making or Breaking the Tourist Experience, in Ryan, C. ed.: *The Tourist Experience*, Continuum, 94-111.
- Budeanu, A. (2007) "Sustainable Tourist Behaviour: a discussion of opportunities for change", *International Journal of Consumer Studies* 31 : 499-508.
- Butcher, J. (2003) *The Moralisation of Tourism: Sun, Sand ... and Saving the World?*, Routledge.
- Cohen, E. (2003) "Backpacking: Diversity and Change", *Tourism and Cultural Change* 2 (1) : 95-110.
- Fennell, D. (2006) *Tourism Ethics*, Channel View Publications.
- Fennell, D. (2008) "Tourism Ethics Needs More than a Surface Approach", *Tourism Recreation Research* 33 (2) : 223-224.
- Goodwin, H. & Francis, J. (2003) "Ethical and Responsible Tourism: Consumer Trends in the UK", *Journal of Vacation Marketing* 9 (3) : 271-284.
- Hampton, M. (1998) "Backpacker Tourism and Economic Development", *Annals of Tourism Research* 25 (3) : 639-660.
- Hampton, M. (2009) "Responsible Backpacker Tourism: contradiction or contribution? Small-scale tourism and local impacts in Southeast Asia"
<http://www.discoverymice.com/WECO2009LAOS/PPT-MarkHampton.pdf> (閲覧日 : 2009年10月18日)
- Holden, A. (2009) "The Environmen-Tourism Nexus: Influence of Market Ethics", *Annals of Tourism Research* 36 (3) : 373-389.
- Hottola, P. (2004) "Culture Confusion: Intercultural Adaptation in Tourism", *Annals of Tourism Research* 31 (2) : 447-466.
- Hottola, P. (2005) "The Metaspatialities of Control Management in Tourism: Backpacking in India", *Tourism Geographies* 7 (1) : 1-22.
- Huxley, L. (2004) "Western Backpackers and the Global Experience: an exploration of

- young people's interaction with local cultures", *Tourism, Culture & Communication* 5 : 37-44.
- Jennings, G. (2005) "Interviewing: a Focus on Qualitative Techniques", in Ritchie, B. Burns, P. & Palmer, C. eds.: *Tourism Research Methods*, CAB International, 99-118.
- Lonely Planet. (2006) "Traveller's Pulse Survey 2006"
http://www.tourism.australia.com/content/News_%20Centre/Travellers_Pulse_Public.pdf (閲覧日 : 2007年 1月23日)
- Lonely Planet. (2008) "Practical Travel Information on Money and Costs in Thailand"
<http://www.lonelyplanet.com/thailand/practical-information/money-costs> (閲覧日 : 2008年11月10日)
- Molz, J. G. (2006) "Cosmopolitan Bodies: Fit to Travel and Travelling to Fit", *Body and Society* 12 (3) : 1-21.
- Mowforth, M. Charlton, C. & Munt, I. (2008) *Tourism and Responsibility: Perspectives from Latin America and the Caribbean*, Routledge.
- Pearce, P. (2005) *Tourist Behaviour: themes and conceptual schemes*, Channel View Publications.
- Pennington-Gray, L. Reisinger, Y. Kim, J. & Thapa, B. (2005) "Do US Tour Operators' Brochures Educate the Tourists on Culturally Responsible Behaviour? -A Case Study for Kenya-", *Journal of Vacation Marketing* 11 (3) : 265-284.
- Plog, S. C. (1974) "Why Destination Areas Rise and Fall in Popularity", *Cornell Hotel and Restaurant Quarterly* 14 (4) : 55-58.
- Ritzer, G. & Liska, A. (1997) "'Mc Disneyization' and 'Post Tourism': Complementary Perspectives on Contemporary Tourism", in Rojek, C & Urry, J. eds.: *Touring Cultures*, Routledge, 96-109.
- Scheyvens, R. (2002a) "Backpacker Tourism and Third World Development", *Annals of Tourism Research* 29 (1) : 144-164.
- Scheyvens, R. (2002b) *Tourism for Development -empowering communities-*, Prentice Hall.
- Shaw, G. & Williams, A. (2002) *Critical Issues in Tourism -A Geographical Perspective-*, Blackwell Publishers.
- Shaw, G. & Williams, A. (2004) *Tourism and Tourism Spaces*, SAGE.
- Smith, M. (2009) "Development and its Discontents: Ego-tripping Without Ethics or idea(1)s?", in Tribe, J. ed.: *Philosophical Issues in Tourism*, Channel View Publications, 261-277.
- Stanford, D. (2008) "'Exceptional Visitors': dimensions of tourist responsibility in the context of New Zealand", *Journal of Sustainable Tourism* 16 (3) : 258-275.
- Urry, J. (1995) *Consuming Places*, Routledge.

- Weeden, C. (2005) "Ethical Tourism: is its future in niche tourism?" in Novell, M. ed.: *Niche Tourism: contemporary issues, trends and cases*, Elsevier Butterworth-Heinemann, 233-245.
- Welk, P. (2004) "The Beaten Track: anti-tourism as an element of backpacker identity construction", in Richards, G. & Wilson, J.: eds.: *The Global Nomad: Backpacker Travel in Theory and Practice*, Channel View Publications, 77-91.
- Wheeler, B. (1994) "Egotourism, Sustainable Tourism and the Environment: a symbiotic symbolic or shambolic relationship", in Seaton, A.V. ed.: *Tourism: the state of the art*, John Wiley and Sons, 647-654.
- Wilson, J. & Richards, G. (2008) "Suspending Reality: an exploration of enclaves and the backpacker experience", *Current Issues in Tourism* 11 (2) : 187-202.
- Yakushiji, H. (2010) *Responsible Behaviour amongst Backpacker Tourists in Less Developed Countries: A case study of Thailand*, University of Exeter (PhD Thesis).